【イベントレポート】 Tied Debate 05 「定住と移動　– 建築は動くか –」

TIED · 2017年1月12日木曜日

2016年9月24日（土）にTied Debate 05「定住と移動　–建築は動くか–」を開催しました。

ゲストディベーターに家成俊勝さん（建築家／dot architects）、村上慧さん（アーティスト）をお迎えし、Tiedメンバー5名とともに、定住と移動の可能性についてディスカッションしました。

今回のテーマは、4月に発生した熊本地震によるところが大きいです。頻発する余震の中、その余震に怯えながらその場所に留まり続ける必要はあるのか。動かないことを前提とした建築の中で営まれる日常が、非常にまずい状況をつくりだすことがあるのではないかと思い始めました。

とはいっても、その場所に愛着をもち、留まり続けたいという欲求も、もちろん理解できます。そもそも「定住」と「移動」はそれぞれ「安定」と「自由」という人間がもつ根源的な志向に結びつき、どちらを取るのかといった単純な二項対立では捉えることができないものです。しかし、明らかな「定住」優勢の現在の状況について、その新たなバランス点について検討することは意義があるだろうと考え、今回のテーマが設定されました。

今回のディベートでは、移動派として家成さん、村上さん、山口陽登、中村昌平（以上Tied)、定住派として志水良、舩橋耕太郎（以上Tied）にわかれ議論を進めました。

村上さんからは、「松戸家」、「くっつきハウス」、「家主リレー」、「移住を生活する」など、家成さんからは「Umaki Camp」、「美井戸神社 」、「Inclusive Architecture 」、「潟の浮橋」、「Media/Art Kitchen」などこれまでのプロジェクトを中心にプレゼンいただきました。

図らずも、お二方のプレゼンで共通して示されたのは、移動性とともに仮設性のもつ可能性でありました。場所への帰属性が希薄であるはずの仮説的なモノが、にも関わらず固有の場所で濃密なコミュニティの形成に寄与していくという、興味深い見解が示されました。

くっつきハウス（http://satoshimurakami.net/）

移住を生活する（http://satoshimurakami.net/）

Umaki Camp (http://dotarchitects.jp/)

MEDIA/ART KITCHEN YAMAGUCHI (http://dotarchitects.jp/)

続いて、山口から熊本地震での移動建築のレポートなどとともに災害時における移動性の重要性が、中村からは海外を中心とした最新のモバイルハウスの動向が、移動派の立論として報告されました。

次に、定住派の立論が舩橋、志水より行われました。舩橋からは「地域性」、「都市空間の成熟」、「公共性」、「モニュメント」といった側面における定住の必要性が、志水からはモービルハウスの普及要因が移動性にではなく経済性（安さ）に起因する旨がそれぞれ報告されました。

移動／定住それぞれの立論を受け、ディスカッションに続きます。ディスカッションの前に、移動と定住の簡単な整理を行いました。そもそも移動といっても、建築などのモノが動くのか、それとも人そのものが動くのかで、考えるべき問題は異なってきます。ダイアグラムにまとめれば図1のようになります。乱暴にまとめれば、現在の一般的な住居サイクルはC（持家）→A（賃貸）→C（持家）をまわっているだけであり、新たなサイクルが可能な、A'もしくはBの検討が必要であることが登壇者に共有されました。

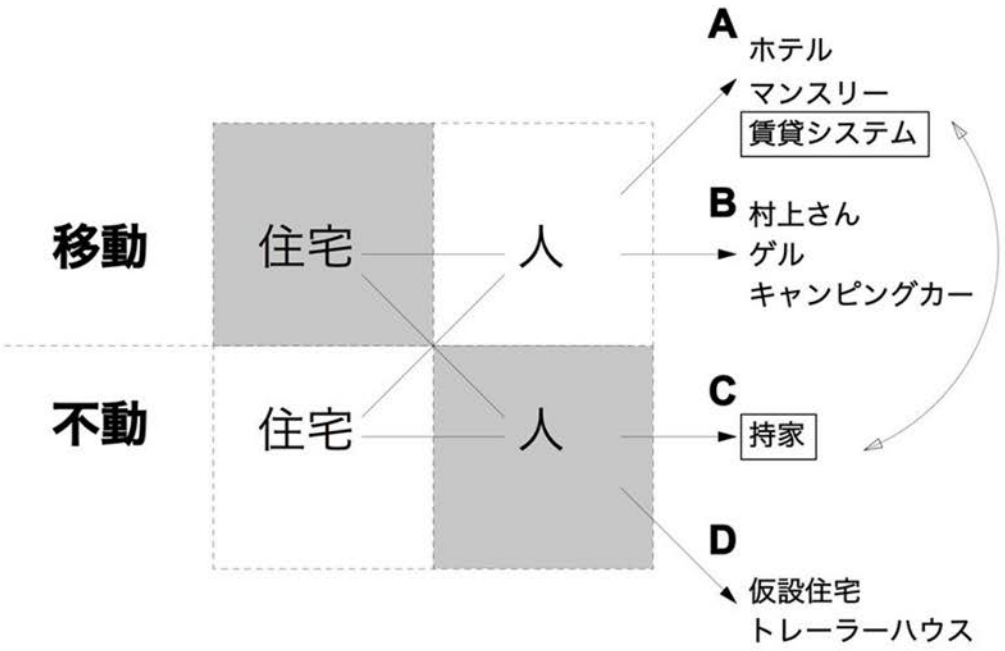

図1: 住宅と人の移動／不動関係

家成さんからは、こうした問題設定に対して「15年もつ家」の可能性が言及されました。パーマメントとコンテンポラリーのどちらでもないその中間としての時間設定から、新たな住宅・住まい方について提示ができるのではないかというものでした。山口からはその補足として、大和ハウス工業の最初期の量産住宅であるミゼットハウスの報告がありました。ミゼットハウスは家成さんのいう中間の時間設定がなされた好事例ともいえるが、クオリティへの追従により結局は確固たるCになってしまったとの指摘がなされました。

ミゼットハウス（http://www.daiwahouse.co.jp/company/history/）

また村上さんからは、dotのプロジェクトと比較すれば、自身のプロジェクトではモノが作られていくその施工過程を注視する視点が、まったく欠如しているとの発言がでました。dotのプロジェクトでは限られた技術での施工方法の検討が綿密に行われ、そこで生まれた施工方法そのものが開かれており、施工過程において既に使い手やその周辺の人々を巻き込み、結果的にコミュニティの形成に寄与しているとの指摘でした。家成さんからは、巷の発生はインフラ的（定住的）な発想とは真逆の状況で生まれるものである。そうした場の発生に興味を持っているとの応答がありました。仮設ゆえの開かれた、ある空きのある状況に、先にみた仮設性とコミュニティを繋ぐヒントがあるのでしょう。

家成俊勝氏と村上慧氏

さらに議論は、土地所有、定住システム等々多岐に渡り進められました。このディスカッションの場で、ひとつの明確な答えが出すのは困難でありましたが、登壇者で少なくとも共有されたのは、移動と定住が同居した状態、移動的定住ともいえる状況に可能性がありそうだ

という認識でした。そこで、最後に今後も検討が進められることを期待し、この目指すべき方向をひとつのワードとして名付けることにしました。

「寝返り的建築」

この言葉に今回の議論を集約しました。安定をしているようであるが、そこにある運動が内在している、そんな状況を建築的につくり出すことに可能性をみます。

ゲストディベーターの家成さん、村上さん、本当にありがとうございました。

（文責：　Tied 前川歩）